

臨床検査科(病理、検体検査、輸血、生理学的検査(エコー脳波など)、細菌)

医 長 ： 神農 陽子

スタッフ数 ： 常勤2名(内 病理専門医 1)、非常勤3名(内 病理専門医 1)

臨床検査技師数 ： 38名

「概要と特徴」

当院は日本病理学会認定病院となっており、日本病理学会認定病理専門医を含め常勤医師2名、上記各部門の専門性を有する臨床検査技師が指導にあたる。細菌部門研修では、感染症科 齋藤 崇先生にも指導いただいている。

”腹部エコーを主に研修したい”など研修医の希望に応じて各部門の研修日程を組んでいるが、それに加えて、検査を依頼、実行する際の注意点などを、検査実務を見学、経験して身につけてもらうことを目標としている。

当院の臨床検査科病理部門では年間約 4800 件の病理組織診断、約 4200 件の細胞診、約 25 例の剖検を行っている。検討が必要な症例については随時各科の主治医と話し合い、学会報告論文作成などに対する援助も行っている。研修医は解剖に立会い、毎月 1 回行う内科剖検症例検討会で臨床側プレゼンテーションを行う事と CPC レポート作成は必須である。当院は幅広く臨床各科が揃っているので、それに対応して幅広い領域の臨床検査を研修することができる。

「初期研修の基本的方針」

- 臨床検査について基本的な知識および能力を身に付ける。
- 自分の専門としたい領域を意識して、臨床検査の各分野を研修する。

「指導体制」

医師として診療を行う中で、検査オーダーを出せば、適切な返事が返ってくる・・・訳ではない。臨床検査部門は裏方、縁の下の力持ちです。多様な検査オーダーに困る場面もたくさんあります。ぜひ一度、裏方の仕事を見学してください。検査を行っている側の仕事を見ることで、無理難題なオーダーをすることが無くなり、よりよい材料採取、オーダー、検体の個人確認のやり方、検査担当者へ受け渡す臨床情報の取捨選択、結果の適切な解釈、などに役立つと思います。検査で困ったときに問い合わせしやすくなるのもメリットと思います。

「修練目標」

希望により各部門を回る期間は異なるが、基本的には各検査の流れとどれくらいの時間がかかるのかを把握する。細菌、検体、病理部門では、各検査検体がどのような状態で提出されるか、個人・検査項目の確認の仕方、検体の処理と検査過程、結果解釈、電カルなどへの報告の仕方、残存検体の保存方法などを見学する。

腹部エコー検査は人気があり、基本的な操作訓練を受けることができる。患者さんがスムーズに検査を受けられるように介助や準備ができると、指導できる時間も多くなるので、患者対応の面にも目を向けてほしい。機器は高価であり、扱いは丁寧に。

「経験可能な症例や手技」

経験する手技	習得すべき知識
病 理	検体受付～標本作成手順を経験、検体提出時の注意点、手術材料の切出、興味のある分野の標本の鏡検
検体検査	検体受付～検査～報告の流れを見学、検体提出時の注意点
血 液	血液型、交差適合試験など。輸血をオーダーする際の注意点
生理検査	腹部エコー 4～5 例／日、午後は心エコーも可能。
細菌検査	細菌検査の流れの見学、グラム染色手技の体験、鏡検

「後期研修について」

病理を専門としたいのであれば、当院では岡山大学病院を基幹施設とするプログラムの連携施設となっており、同プログラムの一環として当院での病理研修も行うことが可能である。

それと同時に大学院への進学が一般的なコースで、大学で病理学的な研究をしつつ大学を中心に色々な病院で経験を積み、関連の病院に病理医として就職する、あるいは研究者の道へ進むというのが通常のコースである。

「当該科での後期研修終了後の進路」

病理専門医の資格を得るだけの経験を積めば、病理医は日本全国で 2000 人あまりと非常に不足しているので、病理医として就職先を探すのには困らない。専門としたい領域があればそれを専門としている施設の病理部門の長あるいは大学の教室の教授と交渉する。当人の長所については最大限の推薦を行う。

当院病理と関係のある大学医局に入局していれば、中国四国地方の中で本人にふさわしい病院が紹介される。特に出産育児をする女性にはその点からも勤務地・勤務病院が考慮される。

「専門研修に進んだ場合の取得資格」

屍体解剖資格、病理専門医、細胞診専門医

「検査科研修についての質問」

岡山医療センター臨床検査科 神農 陽子 まで